

『劔岳 点の記』 追っかけ奮闘記（前編）

牧野美知子

（国立富山高専英語非常勤講師）

昨夜、今月発売になった『劔岳点の記』のDVDを家族と見た。私自身は、試写会3回を含めてこれで9回目の観賞であった。その1つ1つの場面を見ながら、この3年間の映画追っかけの思い出が改めて甦ってきた。周りの夫や息子にこの感動を解説したところでとうてい追っかけにしかこの気持ちはわからない。

2007年7月に上市町で『劔岳 点の記』映画化記念トークショーが行なわれた。作者の新田次郎の子息である作家で数学教授の藤原正彦氏と、映画を監督する木村大作氏の対談だった。そこで初めて木村氏の存在を知った。このことは昨年「測量」3月号に書いたが、木村監督の映画に向かう姿勢は私の魂を揺さぶって、この映画と、70歳を前に前人未踏の挑戦をする木村監督の虜になった。

その年の9月、映画の撮影が地鉄岩嶺寺駅から始まった。大勢のエキストラと俳優、監督の様子がTVニュースで報じられると、居ても立ってもいられなくなった。9月中旬、いよいよ立山でのロケが始まり、ロケ隊が天狗平山荘に宿泊すると聞き、もう1人の追っかけのパートナーと、知り合いである山荘のオーナーに無理やりお願いして、9月20日、ロケ隊（木村監督）と同じ屋根の下で一夜を共にすることが出来たのだった！ 彼らはその前日天狗平で、映画では劔岳への下見に行った柴崎さんと長次郎さんが夕焼けの雲海を見ながら語るあの有名なシーンを撮り、また当日は早朝に雄山へ登り、20年に一度という見事な富士山の姿が撮れたと大喜びで山荘へ帰館した日であった。

私たちが泊まった翌日からは全員重い荷を担いで登って行く、まさに山岳ロケのスタートだった。特に監督の顔には緊張がみなぎっていて、ミーハーな追っかけ気分など引っ込んでしまった。30人ほどのロケ隊が室堂山荘から剣沢へ出発する後姿を見送りながら、「ああ、この炎天下、過酷な高山ロケにみな耐えていけるのかしら…」と非常に不安を覚えたものだった。ロケ隊に加わるわけにもいかず、でも何か私に出来る応援はないだろうか、と考えついたこと

が、「この驚異の映画化のことを全国へ知らせなくては！」。そこで、朝日新聞の『声』に、3000mの立山での撮影が始まり、日焼けしたロケ隊に出会った感動を投稿したら10月2日の朝刊に掲載された。余談だが、それを読んだ埼玉県70代の、小説『劔岳 点の記』熱狂ファンの女性が、30年間映画化を待ち焦がれていたのだ、と新聞社を通して手紙を下さり、それ以来『劔岳…』で意気投合、“追っかけの絆”が続いている。

私たち追っかけにとって大変幸運だったこと…というより文字通り“追っかけ”が成り立ったのは、山荘で泊まったとき、スタッフのかたが、ロケのスケジュール表を下さったことだった。（あ、これは内密である。）それによって○月×日午前は芦嶺寺の雄山神社、午後は上市町大岩山日石寺、△日は岩嶺寺駅だの浮田家だの…。それは天候や進み具合により変更になるというが、自分の仕事に合わせて、行けるところはどこまでも車で駆けつけることができた。ロケ隊に会い、「どうぞ、がんばって！」という気持ちを伝えたかったのだ。さすが山の上は里から「今日はあのへんね…」と見上げて無事を祈るしかなかったが。また、せっかく駆けつけても、「今日は早めに進んで」と引き上げた直後だったり、また次の現場へ追いかけたり…。追っかけとは莫大なエネルギーと時間がかかることがわかった。

10月23日の芦嶺寺の昔の民家嶋家でのロケが1年目の最終日だった。囲炉裏を囲んで柴崎、長次郎、行者が語り合うシーンを撮った。報道陣が沢山つめかけ、今年度の撮影を終えた感想を、俳優さんたちと木村監督にインタビューした。木村監督の表情には1年目の成功の安堵があった。それにしても報道陣の他に、こんなところでロケが行なわれているのを知って来ているのは私たち二人だけだった。これもスケジュール表のお陰。

しかしそこで、報道記者の1人に「先生ではありませんか？」と声をかけられて仰天。昔の生徒だった。ああ、追っかけの姿を見られては権威失墜、弁解の余地もなし…。

しかし、違う！『劔岳 点の記』は胸を張って“追っかけ”してます、と言える映画なのだ、とその時すでに確信していた。この映画を何かなんでも成功させなければ、と。

次の追っかけは翌年の4月からであった。

（続く）